

技術と協力で低湿地開拓

中世は、うち続く戦乱の中にあっても、人々が水利技術や農業技術そして手工業などを発展させ、自然条件を克服し生産を拡大していった時代でもあります。生産の拡大は流通を活発にします。また、庶民の芸能や文化、宗教活動などを発展させます。武力を蓄えることも可能にします。中世は中央権力の支配力が弱いこともあって、民衆が生き生きと活躍する時代でもありました。都に近い地理的位置にある摂津市域は、常に紛争の影響を受け続けていたと考えられています。



昭和3年ごろの実正樋

樋門「実正樋」と安威川以南の開拓

淀川と安威川に挟まれた地域は、低湿地が多く、安威川以北と比べると開発は遅れたと考えられます。

この地域がどのように農地化されていったのかについて、詳しいことはわかりませんが、重要な手がかりとして「実正樋」や「縄手」の存在があります。

高槻市葉間家には、16世紀半ば（戦国時代）と推定される9通の書状が残っています。いずれも鳥養地域から三ヶ牧（高槻市）地域に出されたもので、内容は農業用水や排水路に関するものが中心です。

この文書の中に「さねまさ樋のくち（口）、つかせたて」と実正樋（サネマサヒまたはジッショウヒ）が登場しています。この樋は昭和8年ごろまで使われます。実正樋は全国有数の歴史があるといわれています。

また「縄手」のことも書かれています。縄手と

は、村を水害から守るために村境に作られた道路を兼ねた堤防のことです。用排水路がここを通過するため、ここでの水量調節は隣村との重要問題であったのです。

16世紀半ばにこのようなことが書かれているということは、次のような大事なことを教えてくれます。

第一に、淀川と安威川の間各所に、すでに村が形成されていたということです。

第二に、その村に住む人々が、淀川の水を取り入れて農業用水として利用していたということです。一般に、大きな川を農業用水として利用するためには、高度な技術と多くの労力を必要とするといわれていますが、この時代にすでにそれを成し遂げていたのです。

第三に、この地域の開拓にとって最大の課題は排水であり、いくつもの村の協力体制が必要ですが、それも出来ていたことがわかるのです。次に述べる惣村（ソウソン）がこの地域に出来上がっていて、初めて可能なことでした。

なお、この長い歴史を持つ実正樋は、非常に重要な樋門であり、一時は尼崎方面にまで水を送っていたといわれています。ところが、昭和8年から始まった淀川の低水化工事にともなって廃止されました。

農民の自治組織「惣村」

鎌倉時代の後期から、農民の自治組織である「惣村（惣）」が徐々に形成されていきます。

惣村は、村ごとに「惣掟（規約）」を定め、村の神社の祭礼を運営し、農業や生活に必要な共同作業を行い、自然災害や戦乱から暮らしを守る役目を果たしてきました。また、時には領主の過酷な支配に対して、強訴や一揆を組織することもありました。

惣村は、近隣の村とも連携を高めるにしたがって、強い力を持つようになっていき、大規模な仕事に取り組むようになっていきました。守護大名などと主従関係を結んで、武士化する者（地侍）も現れ、農民が武力を蓄えるようになっていきました。

商品経済の発展と「一津屋」「市場」

中世に農業の生産力を発展させた要因はいろいろあります。灌漑設備の整備、鉄製農具の普及、牛馬の利用、糞尿など肥料の使用、稲を中心とした品種改良、二毛作の普及などです。農業生産の上昇は、流通が盛んになることと結びついています。手工業も織物、製鉄と鍛冶、陶器類の製造、酒等の醸造など多くのものが発達しました。また、各地に特産品も生み出されていきました。

こうして商品経済が活発になり、各地に市場が開かれ、問屋や運送業が発展し、倉庫がたくさん建てられていきました。

摂津市域の地名として残っている「一津屋」は、流通の幹線路である淀川と神崎川の分流地点に、倉庫・運送・貨物仲介を業とする「津屋（問丸ともいう）」があったことを示すものだろうと考えられています。文献上の証拠はありませんが、川を挟んで「江口」が賑わったように、物資の中継地としてちょうど良い位置を占めているからです。同様に、千里丘方面にある地名「市場」も、亀岡街道にあった市場からきたのだろうと考えられています。こちら市場があったと考えるのが自然な場所と言えます。



千里丘七丁目
市場池オアシス広場
の中にある市場池の
石碑

芸能集団—鳥養猿楽

生産力が高まり民衆が力を持つと、文化・芸能・宗教なども、民衆の活動が活発化します。

摂津市域で注目されるのは「鳥養猿楽」です。猿楽(サルガク)の専門集団が鳥養にいたのです。

当時、神社の祭礼や市場に市が立って人が大勢集まるとき、広場などで「猿楽」(物まね・曲芸・寸劇など)や「田楽(デンガク)」(踊り・楽器演奏・寸劇)などが行われました。

猿楽は、神が老翁の姿で人々に祝福を与える翁猿楽を表芸とし、大寺院の庇護のもとに同業者集団的な組織「座」を結ぶようになっていきます。

鳥養猿楽は、愛幸太夫を座長とする本格的な猿楽集団で、京都の東寺に招かれて、境内の鎮守八幡宮の祭礼で奉納猿楽を演じる独占的権利を持っていました。しかし、次第に大和猿楽へ吸収されていきます。

なお、猿楽はその後、「能」や「狂言」という日本を代表する芸能に磨き上げられ、今日まで残るものとなっていきました。

鳥養宗慶と宗慶島

16世紀の半ば(戦国時代)の鳥養に鳥養宗慶というその地方の有力者がいました。実正樋のことが書かれていた「葉間家文書」の差出人の一人です。この人は書道家として有名で、飯尾流の和様書道を受け継ぎ、鳥養流という新流を開いた人として有名です。

ところで、淀川にはこの人の名を取った「宗慶島」という川中島がありました。耕作も行われていて、50石の年貢の対象になっていたといわれています。後には里芋畑や麦畑になっていましたが、大正9年の「大塚切れ」という大洪水の後、淀川堤防のかさ上げのためにその土砂が使われて、姿を消してしまいました。また「宗慶」という小字があり、屋敷跡と考えられます。

近年の河川改修が行われるまで、淀川には多くの中州や浅瀬があり、河道は今よりずっと広く、ゆうゆうと流れていたようです。